

短 報

和歌山県におけるヒメナミキ (シソ科) の産地記録

人間環境大学環境保全

藤 井 伸 二

京都大学フィールド科学教育研究センター紀伊大島実験所 梅 本 信 也

Locality records of *Scutellaria dependens* (Labiatae) in Wakayama Pref. Shinji Fujii (*University of Human and Environments*) and Shinya Umemoto (*Kii-Oshima Research Station, Field Science Education and Research Center, Kyoto University*)

A new locality of *Scutellaria dependens* (Labiatae) was found at the wasted paddies in Kushimoto-cho, Wakayama Pref. revealed the last existing population in the prefecture. This species grows at both inland and seacoast habitats, and such distribution pattern is exceptional among the cold marshy species.

Keywords : *Scutellaria dependens*, Wakayama Pref.

キーワード : ヒメナミキ, 和歌山県

和歌山県東牟婁郡串本町においてヒメナミキ *Scutellaria dependens* Maxim. の群落を見いだした。本種は絶滅が危惧される植物として、近畿地方ではCランク (レッドデータブック近畿研究会編, 2001), 和歌山県ではENにランクされている (和歌山県編, 2001)。県下では希産種であることから、過去の記録も含めた分布の再調査を行った結果を報告する。

本研究を進めるにあたり、大阪市立自然史博物館の内貴章世博士と京都大学総合博物館の永益英敏博士には標本閲覧および文献閲覧の便宜を図っていただいた。和歌山市の山本修平氏、和歌山県立自然博物館の内藤麻子氏、元和歌山県立自然博物館山本晃氏には和歌山県のヒメナミキについて貴重な情報をご教示頂いた。記して感謝する。この研究は、京都大学フィールド科学教育研究センター紀伊大島実験所による「古座川プロジェクト」の一環として行った。

京都大学総合博物館と大阪市立自然史博物館に収蔵されているヒメナミキ標本と各種の文献調査の結果、ヒメナミキは近畿地方の2府5県すべてに分布していた (図1)。本種の生育環境は、氾濫原のヨシ原およびその辺縁 (例えば、琵琶湖・淀川水系や円山川水系など)、中山間地の放棄水田やその周辺の湿地 (宝塚市, 上野市・島ヶ原村境界, 一志町など)、やや高層的な湿原やその辺縁環境 (大津市比良山, 美杉村池ノ平, 宮津市上世屋など)、沿海湿地 (熊野灘, 紀伊水道周辺など) のように多岐にわたっていた。しかし、琵琶湖・淀川水系を除くと、産地数は限られているうえに大部分が小規模な群落であると考えられる。

文献調査と標本調査の結果、和歌山県におけるヒメナミキの既知産地は、和歌山市雄ノ浦 (和歌山県立自然博物館, 2004)、太地町河立湿地 (木下, 1996) と那智, 三輪崎, 新宮 (宇井, 1929) であった。2009年5月の植物多様性調査において

確認した串本町田原（旧、古座町田原）堂道のヒメナミキ群落は新産地となる。ヒメナミキが生育していたのは放棄水田跡に成立した湿地環境内の畦畔跡であった（図2）。畦畔跡はY字型に二分岐してそれぞれの先端は行き止まりになっている特殊な形状（梅本・山口，1997）を呈する「行止り型水田畦畔」（梅本，2009）の遺構である。耕作放棄によって崩壊が進んだ畦畔跡を保全・維持するために，2008年11月に紀伊田原ウエットランドの会と京都大学紀伊大島実験所の共同事業による地上部植生の刈り取り作業が行われた。ヒメナミキは北東側に分岐した畦畔跡上（おおよそ10m×1mの範囲）に集中して生育していた。2009年

5月23日の調査時には，高さ約15～20cmに生長したヒメナミキはようやく開花を始めたところであった（図3）。畦畔上にはトダシバ *Arundinella hirta* (Thunb.) Tanaka が広汎に優占していたが，ヤノネグサ *Persicaria muricata* (Meisn.) Nemoto, セリ *Oenanthe javanica* (Blume) DC., コブナグサ *Arthraxon hispidus* (Thunb.) Makino, アシカキ *Leersia japonica* (Honda) Makino ex Hondaなどがモザイク状の優占群落を形成しており，群落高は約15～30cmであった。なお，田原堂道でのヒメナミキの生育は1994年の梅本による調査によってすでに認められていたことから，耕作放棄が顕著化する以前からヒメナミキ群落が維持されてい

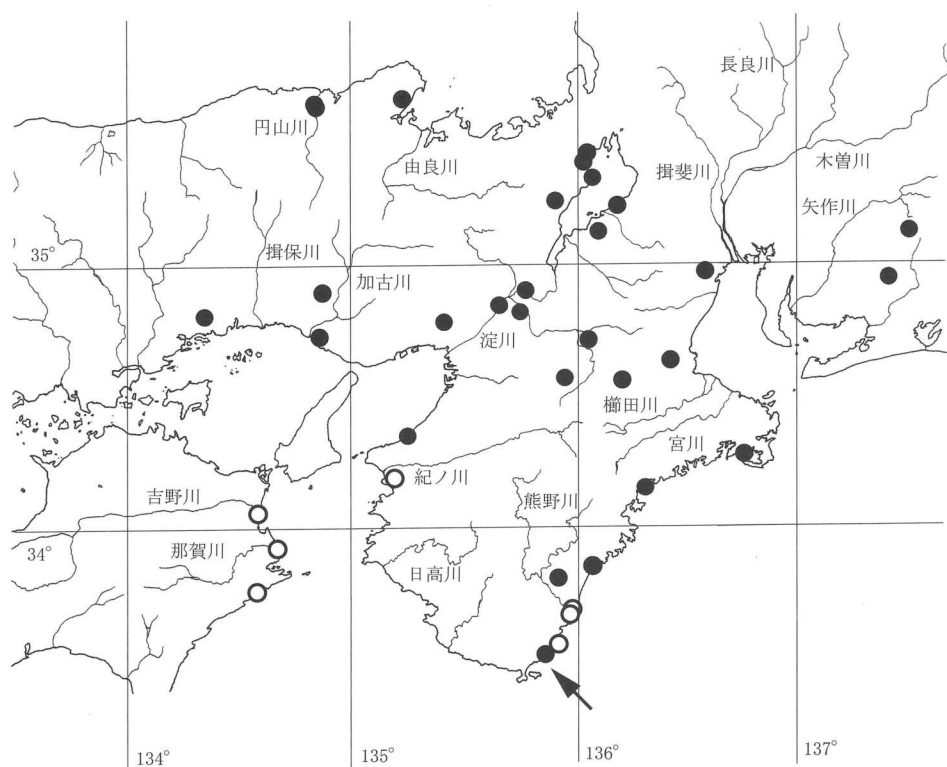


Fig.1. Distribution of *Scutellaria dependens* in Kinki District and its adjacent regions, revised Fujii (1994). ●: based on specimens, ○: based on literatures. An arrow showing the locality of Kushimoto-cho.

たと推測される。

和歌山県におけるヒメナミキの既知産地のうち、現存が確認できるのは串本町田原堂道のみである。和歌山市雄ノ浦は埋め立て等により湿地が消失している。太地町河立湿地では1996年に確認されている(木下, 1996)が、最近の生育は確認されておらず(山本晃氏・内藤麻子氏, 私信), 消滅したものと思われる。那智, 三輪崎, 新宮の3産地については、宇井(1929)の報告以降の情報がまったく無い。現在の新宮地域は湿地環境に乏しく、この地域に現存する泥炭湿地の新宮藪沢(いのど)浮島植物群落(国指定天然記念物)にもヒメナミキの記録はない(中嶌, 1991)ことから、ヒメナミキは新宮地域から絶滅したものと思われる。以上のことから、田原堂道のヒメナミキは和歌山県下で唯一の確実な現存群落であり、その保全には格別の配慮が必要と考えられる。

ヒメナミキは日本の寒冷地の湿地に多産することから、氷期に広く分布していたものが近畿地方各地の微小湿地に断片的に遺存したと考えることが可能である。しかしながら、北日本に多産することから氷期の遺存と目されるドクゼリ *Cicuta virosa* L. (藤井, 1994), ヌマゼリ *Sium suave*

Walter var. *nipponicum* (Maxim.) H.Hara (藤井, 1998), オオマルバノホロシ *Solanum megacarpum* Koidz. (藤井, 1994), ミツガシワ *Menyanthes trifoliata* L. (Kokawa, 1961), サギスゲ *Eriophorum gracile* K.Koch (小林ほか, 1998), オニナルコスゲ *Carex vesicaria* L. (藤井, 1994)などの湿地性植物種は、近畿地方の沿海湿地に生育することはない。沿海地に生育する氷期の遺存種と考えられる植物にオオクグが挙げられるが, Araki & Kunii (2008) は本種が汽水域に生育して冠水時に果実が浮遊散布することを報告しており、先述の湿地性植物の分布パターンと同列に扱うことはできない。ヒメナミキの属するタツナミソウ属は雨滴散布をすると考えられている(中西, 1994)が、コルク層の発達といった海流散布に適した特別な形態は見られない。それゆえ、紀伊半島東部や徳島県の沿海湿地におけるヒメナミキの多産地性は謎に満ちている。こうした生物地理学上の観点から、和歌山県唯一の現存個体群の学術的価値

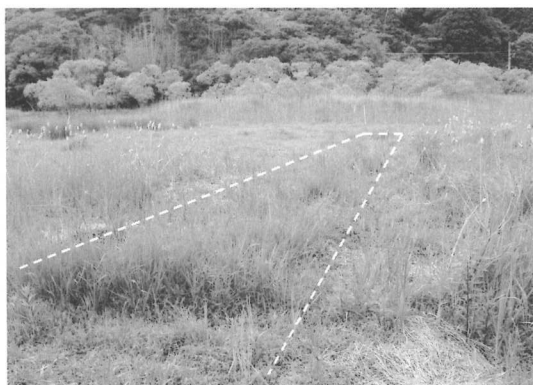


Fig. 2. Vegetation on the relic of the paddy levee (dashed lines) in Tawara, Kushimoto-cho (May 23, 2009).



Fig. 3. A specimen of *Scutellaria dependens* (S. Fujii 13932).

はきわめて高いと考えられる。

今後のヒメナミキの保全については、現状が維持できればそれほど問題はないと考えている。しかし、過去15年間に急速な耕作放棄が進んでおり、それにとまなう植生の変化（遷移進行と大形植物の繁茂）がみられることから、現状を維持することそのものが困難になりつつある。遷移進行の抑制には除草等の人為的な助力が必要であると思われる。また、国道沿いを流れる排水路については、湿性植生の維持に配慮した水位管理が望まれる。

なお、この湿地からは湿地性希産種であるツクシカンガレイ *Schoenoplectus multisetus* Hayas. et C.Sato とヒメカンガレイ *Schoenoplectus mucronatus* (L.) Palla var. *mucronatus* が記録されており、ツクシカンガレイは和歌山県唯一の産地である（前田ほか, 2008）。他にも、フサスゲ *Carex metallica* H.Lev. など多数の貴重種の生育が確認されている（木下, 1991）ことや最近に発表された新種ベンケイヤワラスゲ *Carex benkei* Tak.Shimizuの分布が記録されている（Shimizu, 2009）ことから、この湿地は和歌山県下における希少湿生植物のホットスポット*である可能性が高く、早急な植物相の全容解明とそれに基づいた保全策の提言が必要と思われる。

本文中の学名については、米倉・梶田（2003-）に従った。

*ホットスポットについてはReid (1998), Meyers et al. (2000) を参照のこと。

引用文献

- Araki, S. & H. Kunii. 2008. Relationship between seed and clonal growth in the reproduction of *Carex rugulosa* Kuk. in riverside meadows. *Plant Species Biol.*, 23 : 81-89.
- 藤井伸二. 1994. 琵琶湖岸の植物－海浜植物と原野の植物. *植物分類地理*, 45 : 45-66.
- . 1998. 滋賀県で生育が再確認されたヌマゼリの生態. *植物分類地理*, 49 : 201-204.
- 木下慶二. 1991. 田原湿地（和歌山県古座町）の植生について. *南紀生物*, 33 : 112-118.
- . 1996. 河立湿地（和歌山県太地町）の植生について. *南紀生物*, 38 : 91-96.
- 小林禧樹・黒崎史平・三宅慎也. 1998. 六甲山地の植物誌. 299pp. (財) 神戸市公園緑化協会, 神戸.
- Kokawa, S. 1961. Distribution and phytostriatigraphy of *Menyanthes* remains in Japan. *J. Biol. Osaka City Univ.*, 12 : 123-151.
- 前田哲弥・山本修平・北野一夫. 2008. 和歌山県に産するカヤツリグサ科フトイ属植物の分布. *和歌山県立自然博物館館報*, 26 : 43-66.
- Meyers, N., R. A. Mittermeier, C. G. Mittermeier, G. A. B. da Fonseca & J. Kent. 2000. Biodiversity hotspots for conservation priorities. *Nature*, 403 : 853-858.
- 中西弘樹. 1994. 種子はひろがる 種子散布の生物学. 255pp. 平凡社, 東京.
- 中嶋章和. 1991. 浮島の森の植物相の変遷. 「国指定天然記念物新宮瀧浮島植物群落調査報告書」(新宮瀧浮島植物群落調査委員会・新宮市編), pp. 83-99. 新宮瀧浮島植物群落調査委員会・新宮市, 新宮.
- レッドデータブック近畿研究会 (編). 2001. 改訂・近畿地方の保護上重要な植物－レッドデータブック近畿2001－. 164pp. (財) 平岡環境科学研究所, 川崎.
- Reid, W. V. 1998. Biodiversity hotspots. *Trends Ecol. Evol.*, 13 : 275-2780.
- Shimizu, T. 2009. *Carex benkei*, a new species of *Carex* (Cyperaceae) from Japan and

- China. Acta Phytotax. Geobot., 60 : 41-46.
- 宇井縫造. 1929. 紀州植物誌. 338pp. 近代文藝社, 大阪.
- 梅本信也. 2009. 田原湿地の特徴と保全. 田原ウェットランドの会2009年度シンポジウム講演会資料, 1-7.
- ・山口裕文. 1997. 水田畦畔の類型と畦畔植物の多様性. 種生物学研究, 21 : 27-33.
- 和歌山県 (編). 2001. 保全上重要なわかやまの自然—和歌山県レッドデータブック—. 428pp. 和歌山県環境生活部環境生活総務課, 和歌山.
- 和歌山県立自然博物館. 2004. 小川植物コレクション標本目録. 292pp. 和歌山県立自然博物館, 海南.
- 米倉浩司・梶田忠. 2003-. BG Plants 和名—学名インデックス (YList). http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html (2009年7月18日確認)
- 証拠標本：和歌山県東牟婁郡串本町田原 堂道: S. Fujii 13932 (KYO, OSA).

